

有限会社 絞染色 久野染工場

取締役

久野剛資氏

名古屋市長区鳴海町字境松4-21

「是非お見せしたい作品がありますから…」と言って見せてくれたのが表紙のブロンズ色に輝く歌舞伎衣装。スーパースター歌舞伎の市川猿之助さんへのプレゼンテーションとして製作したもので、絞りを極めようという久野氏の息づかいを感じさせる作品だ。久野剛資氏は、伝統工芸として一大産業を形成してきた「有松絞り」を日本だけの産業として閉じ込めるのではなく、国際競争力を持った製品に育てていきたいと、様々な業種とのコラボレーションを展開しながら新たな伝統作りにも挑戦している。

伝統工芸の本質を継承した技術革新を追求



絞りをカジュアルに着て欲しいという久野氏は「風絞り」のジャケットにブロンズカラーのストールを着こなしてくれた。

136°54'E



◆地名のいわれ◆

周辺一帯が松林だったことから有松になった説と、新しい町という意味の「新町(あらまち)」がなまって「ありまつ」となったという説があり定かではない。



繁栄を極めた当時をしのばせる塗り籠造りの町並みは名古屋市の「町並み保存地区第1号」に指定されている(上)
6月3・4日に開催された有松まつりにはたくさんの観光客が訪れた(下)

浮世絵師の安藤広重による東海道五十三次の「鳴海の宿」に描かれている絵の中で、行きかう人々と共に土産として「有松絞り」が売買されている様子が描かれている。

慶長13年(1608)当時、有松は「鳴海宿」と「池鯉附宿(知立宿)」の中間にあり、人通りも少なく追いはぎが続出し治安維持に困り果てていた。そこで、尾張藩は阿久比庄(現愛知県知多郡)から竹田庄九郎始め8名を移住させて宿場を開いたという。

竹田庄九郎は、当時名古屋城の築上工事に参加していた人たちが、美しい藍染めの絞りの着物を着用しているのを知り、それを真似て知多の特産である木綿を利用した豆絞りなどの手拭いなどを作り、軒に吊るして東海道を行きかう人々に販売し、有松の産業として育てた。その後、明暦元年(1655)に豊後から移住した医師三浦玄忠の妻が、豊後絞りの技術を指導し、三浦絞りとして衣服などに幅広く適用されるようになり、ゆかたや高級着物など多彩な絞り製品が開発された。

天和元年(1681)には尾張藩から「有松絞り」と名付けられ地域の特産品として保護され、その後職人たちのたゆめぬ研究、努力により絞りの種類や色柄を増やし、元禄時代

には一大産地として隆盛を極め現在へと受け継がれている。

“工芸染色”から“工業染色”へ

2001年10月、米国同時多発テロ勃発の中、インターテックスミラノ展・ニューヨークIFFE展[※]のジャパン・クリエーションで久野氏の『絞り加工製品』が展示紹介されていた。これまでにない独自の創作表現による絞り製品に注目する、多くのバイヤーの中で一際熱い視線を送っていたのがティファニーのFFE(家具・什器・備品)担当デザイナー、ロビン・バックウォールター氏であった。氏は2004年にオープンしたティファニー丸の内東京店のカーテンへの採用を決定し、イタリアからオーダーした特注生地を久野氏に託し製作を依頼した。

このカーテン素材であるポリエステルへの絞り加工について、久野氏は「これまでポリエステルなどの化学繊維が絞りに使われなかったのは技術的な問題もありましたが、伝統的工芸品産業の枠では素材がシルクと木綿に限られていた事もあります。伝統にこだわりすぎることで時代のニーズに対応できず、産業としての絞りが衰退していくことを危惧しました。有松絞りの伝統工芸品としての

※IFFE:INTERNATIONAL FASHION FABRIC EXHIBITION